

『付加価値のある留学』体験談

大学で教育科学を学ぶ 蛭原千園さん



日本の四年制大学で教育科学を専攻する蛭原さんは、大学3年生の前期を休学して、ニュージーランドで6ヶ月の英語留学をされました。帰国が目前に迫った時、せっかく留学に来ているニュージーランドの教育事情をもっと詳しく勉強し、実際の教育現場でのボランティアにも参加したい！とのご希望をいただき、NZ Ryugaku Office のオリジナル企画『付加価値のある留学・スタディーツアー』にご参加くださいました。

■ 蛭原千園様のための“付加価値のある留学”スタディーツアー

ご依頼内容： ニュージーランドの特徴ある幼児教育『テファリキ』の内容をよく学び、実際の教育現場である、現地幼稚園、小学校、中学校を視察し、現地小学校では文化教育ボランティアも体験するスタディーツアー。

訪問場所	スタディー内容
現地公立幼稚園	<ul style="list-style-type: none">・NZ 独自の幼児教育理念テファリキを学ぶ・テファリキの考えに基づく教育現場の見学・具体的な幼児教育実践の視察・現地幼稚園の園長先生から直接お話を伺う
現地公立小学校	<ul style="list-style-type: none">・全国統一カリキュラム NZC について学ぶ・初等教育・小学校の教育現場視察・Year1 (5歳児) のクラスで教育実習ボランティア・レベルごとに分かれる授業風景の視察
現地公立中学校	<ul style="list-style-type: none">・ICT 教育の進む中学校教育現場の視察・教わる学習ではなく、考える学習の実践視察・パソコンを使ったリサーチの授業の見学・日本とは異なる数学のテキストの見学・外国語教育の一例の見学

Q1: ご留学先に NZ を選ばれたきっかけは？

いくつかあった留学候補地の中で、働くことが合法的に認められている学生ビザを取得できるという、ニュージーランドの学生ビザの特徴に惹かれて、留学先をニュージーランドに決めました。ですが実際に来てみたら、周りでアルバイトをしている留学生の生活の様子を見て、アルバイトをしてしまうとアルバイトが中心の生活になってしまうような気がして、NZ 国内旅行や自分が興味を持ったことに挑戦できなくなるのではないかと思い、結局アルバイトはしませんでした。



Q2: 今回『付加価値のある留学』に参加されたきっかけは？

私は日本の大学を休学して6ヶ月間の英語留学に来ました。NZ 留学中には、NZ 国内旅行にも出かけ、それなりに充実した時間は過ごしたのですが、帰国を前にして NZ Ryugaku Office の藤巻さんとお話しする機会があり、それまで過ごしてきた6ヶ月の留学生生活を振り返ってみて、少し焦りを感じました。

せっかく日本の大学を休学までして来た留学で、ただ英語を学んだというだけで、何かの資格を取ったわけでも、専門スキルを学んだわけでも、海外での仕事経験を積んだわけでもなく、またボランティア活動などの、特別な体験も何も積んでこなかった事に帰国を目前にして気がついたからです。

自分の大学の専攻分野に関係が深い、現地の教育分野に関係するボランティアをすればよかった。。。そう思い、現地の小学校や幼稚園でのボランティア活動に今から参加できないか藤巻さんにご相談しましたが、最近は学校側が無犯罪証明書類の提出などを求め、受け入れが大変厳しくなっていることを知り、自分の帰国予定までに、それらの書類を準備することはほぼ不可能だとわかりました。

そんな時、藤巻さんが提案してくれたのが、今回参加した『付加価値のある留学・スタディーツアー』でした。この留学プランは、日本の大学で学んでいる専攻分野に沿って、現地の専門分野の情報を詳しくリサーチし、現場視察や半日のボランティア活動などにも参加できる特別なスタディーツアーです。

私の場合、日本では教育科学を専攻していて、卒業後の進路も教育関係の仕事につきたいと考えていましたので、そのことをお話しすると、ニュージーランドの教育システムを語る上で、欠くことのできない、世界からも注目されるニュージーランドの幼児教育理念、テファリキについての学習と、現地幼稚園の視察、そして、2時間の教育実習ボランティアを含む小学校見学と、ICT 教育などが盛んな現地の中学校の見学までを全て組み込んだ、私だけのスタディーツアーを組んでいただけることになり、是非参加したいと思い申し込みました。

Q3: 実際に参加したスタディーツアーは如何でしたか？

自分が知りたいと思っていたのは、正にこういう事でした！ と思うような内容の濃いスタディーツアーで、参加して本当に良かったと思いました。

＝まずは現地の幼児教育と幼稚園について＝

建物の中が小さなクラスに仕切られておらず、40人の園児達を4人のフルタイムの先生と数人のアシスタントティーチャーで全体を見るスタイルにとっても驚きました。園内は建物の中にも外にも、5、6人がけほどの小さなテーブルと椅子があちこちにたくさんセッティングされており、その一つ一つに、子供達の興味を引くたくさんの遊びと学びの要素が詰め込まれていました。例えば、口に入れても安全な先生の手作りねんどのテーブル、同じく毒性の無い食紅などと同じ原料の絵の具を使ったお絵描きのテーブル、磁石が入った積み木のテーブル、水遊びのテーブル、絵合せパズルのテーブル、おままごとのキッチン、レゴがたくさんのマット、絵本のマットに、アスレチックジムなどなど、一つとして同じ遊びはなく、また、そのどれもがきちんとした学びの要素を含んだ遊びになっていました。



例えば、磁石の入っている積み木で遊ぶことによって子供達は知らず知らずのうちに物理やバランス感覚を学び、不思議なことへの興味と探求心を身につけて行きます。



大きさを比べたり計ったりすることからは数学の基礎を学び、考え、実験することからは化学の基礎を学びます。芸術で表現することを学び、自分と異なる民族のお友達と喜びを共有することを学びます。ただ、楽しく遊んでいるようであっても、その遊びの中には、本当にたくさんの学びの要素が、考えられ、盛り込まれていることを知り、驚きました。



また、移民国家として、自分とは異なる文化背景を持つお友達と共に学ぶことや、先生方の対応を見て実際にテファリキの考えが隔々にまで行き届き、実践されていると思いました。こういった幼稚園での基礎教育があるからこそ、小学校、中学校に進学していても、基本的な学びに対する考え方や姿勢が変わらず、移民に対して寛容で、人柄の穏やかなニュージーランド人の国民性につながっているのだと思いました。



幼稚園を訪問した日は丁度タイミング良く、地域の図書館のスタッフさんが幼稚園を訪問し、マットタイム（園児達が全員敷物の上に座ってお話を聞いたり、お歌を歌ったりする時間）に歌と紙芝居をしてくれる日で、子供達もみんな大喜びでマットタイムを楽しんでいました。家庭、幼稚園、地域社会がよくコミュニケーションを取り社会全体で子どもを育てるというテファリキの考えが、ここでも実践されていました。



=小学校見学と教育実習ボランティアについて=

小学校のクラスも、大きなお教室を2つのクラスが半分ずつ使うスタイルで、同じクラスの中でもさらに児童の学習進度に分けて、幾つかのグループに分け、それぞれのグループにあった内容で授業を進める時間と、みんなが集まって一斉に先生のお話を聞く時間を交互に組み合わせ、大変興味深い授業をされていました。

今回私は現地の小学校の Year1(1年生、5歳児のクラス)で、2時間のボランティア時間を頂き、5月のこどもの日にちなんで、紙芝居形式で日本のこどもの日のお話をし、折り紙で作ったこいのぼりをみんなにデコレーションしてもらい、さらに新聞紙で兜を一緒に折るという文化体験授業の教育実習をさせていただきました。



紙芝居はクラス全員(15人程度)に一斉にお話しし、こいのぼりとカブトを折る実習は一つのクラスを3グループに分けて、私がひとグループ、残りの2グループを同行していただきました NZ Ryugaku Office の藤巻さんと磯金さんにそれぞれひとグループずつを担当していただき、3人で手分けして教えました。



最初は本当に緊張しましたが、こいのぼりも、カブトもみんなが本当に楽しんでくれたので、すごく嬉しかったです。紙芝居を使って説明をした部分は英語での説明という点でもとても難しかったです。

実は大学2年生の時に日本での教育実習も経験していましたが、日本の大学の研修で、韓国の小学校でもボディーランゲージを使った授業の体験をさせてもらったこともあるのですが、これまでの教育実習の中でも今回が一番緊張しました。

ニュージーランドの小学校は5歳の誕生日を迎えた順番に小学校に入学してくるので、私が実習させていただいた Year1 のクラス内では特に、読み書きや学習の進度に差がありません。そうした生まれた月による成長と学習の進度の差をなくし、それぞれの学力に合わせた最適な教育を行うというニュージーランドの学校教育のスタイルを実際に感じることができました。



= 中学校見学について =

日本の中学校教育では、机に座り、黒板の前に立って説明する先生のお話を聞き、みんなで同じ課題に取り組む一斉教育の形ですが、ニュージーランドの中学校教育は学生たちの主体性が大変重視されていると感じました。



私が見学したのは12歳のクラスの社会の授業でしたが、学校から貸し出しのラップトップパソコンを一人一台持ち、大まかに決められた内容についてそれぞれの興味と探究心によってリサーチを進めて行くという授業でした。

この日のリサーチ課題は『発明家について調べる』っというお題だったのですが、例えばエジソンについて調べている学生もいれば、シンクロナイズスイミングをスポーツとして初めて始めた人は誰か、っという内容を熱心に調べている学生もいました。学生たちは個々にテーマに沿ったり

リサーチを進め、レポートにまとめ、日を改めてクラスで発表します。

調べるツールは一般のインターネットの検索ツールを使っていて、日本の ICT 教育教材を使った ICT 教育とはかなり異なると思いました。日本も最近は ICT 教育を取り入れる教育機関が増えていますが、子供用 ICT 学習キットのような教材を使う場合がほとんどで、こういった実際の社会に出てからも役に立つようリサーチ能力を磨く授業が、中学生からスタートしていることに大変驚きました。また、学校内



でのインターネットのアクセス制限はかなり厳重に管理がされており、今回見学した学校ではありませんが、別の全寮制の学校では、就寝時間が過ぎてから携帯のWIFIを使うと、瞬時に誰がどのページにアクセスしたか分かるまで管理させているというお話を聞き、驚きました。

教室に貼ってあるパンダの絵は、外国語科目の中国語の授業でみんなで水墨画を描いたそうです。ただ単に机に向かって語学を学問として学ぶのではなく、水墨画や文化体験を通して、外国に興味を持ち、言葉を学ぶことは、とても素晴らしいと思いました。



Q4: もう直ぐご帰国ですが NZ 留学はいかがでしたか？

今回この付加価値のある留学スタディーツアーに参加できて本当に良かったと思っています。教育について勉強しているので、こんなに深く日本と海外の教育について考える機会をいただけたことに本当に感謝しています。



今回の見学を通してニュージーランドの教育現場での実際の教育を肌で感じ、一番素晴らしいと感じたのは、多民族国家だからこそできる授業を実践している点です。日本でも外国人の居住者はどんどん増えているのに、日本の教育現場ではまだまだ外国人に対する支援が足りないと感じました。日本語が堪能ではない親御さんと学校側の交流や連携は大変難しいのが現状です。

ですがニュージーランドでは、英語が母国語ではない学生さんのための英語クラス、ESOL クラスがほとんどの学校で提供されていて、幼稚園でも、日本語が母国語ではない学生さんの親御さんに向けての学級通信を英語の他に中国語でも発行するなど、英語が母国語ではない移民の親子が現地の生活にすんなり溶け込むための協力が幼稚園や学校側からも提供されていました。

一番印象に残っている小学校の先生の言葉に、『学校では英語を一生懸命学び、家では‘お父さんお母さんと母国語で話さない。英語の他に自分を表現したり考えたりする手段がもう一つあるということは、とても素晴らしいこと。だから母国語もしっかり伸ばしなさい。その代わり学校では英語を一生懸命勉強しない。』と言っていた点です。また、英語が堪能ではない学生さんに、早く英語での生活になじむようにプ

レッスンをかけるのではなく、母国語や民族のアイデンティティーも忘れずに、大事に育てゆく気持ちを教えていて素晴らしいと思いました。



私が教育実習をさせていただいた Year1 のクラスには、ニュージーランド人をお父さんに持ち、日本人をお母さんに持つ2人の女の子が在籍していましたが、折り紙で鯉のぼりを作っている時、担任の先生が、せっかく日本人の先生が来てくれたから日本語で質問してもいいのよと声をかけると、はじめは恥ずかしがって英語で話していた学生さんが少し日本語で話しかけてくれました。それを見ていた隣に座っていた仲良

しのお友達が、ため息混じりに、『いいなー、私も英語以外の言葉が喋れたらいいのに。うちの家族はみんな英語しか喋れないから、私も英語しか喋れない。私も他の言葉をしゃべってみたいのになー』と、本当に残念そうに言っていました。

他の国から移住してきた他民族のお友達を自分とは違う存在として排除してしまうことなく、むしろ尊敬し、自分も外国語が話せるようになりたいという興味につなげるニュージーランドの教育が本当に素晴らしいと思いました。

こうして語学への興味を大きくした学生さんたちは、中学生になると学校の海外研修でエデュケーションツアーに参加する機会に恵まれることもあるそうなのですが、驚いたのは、その資金の調達のためにお友達や家族と協力して、手作りのクッキーや、ケーキを焼いてそれを週末マーケットなどで売り、資金を調達したり、募金を募ったりするそうです。

日本だったら、普通に親のお金に頼り、親が支払ってくれるのが当然と考えると思いますが、中学生のうちから、自分のことは自分で決めて、その責任をしっかり自分で負うことの訓練をしていることに、本当に驚きました。



もともと、将来は教育関係の仕事につきたいと考えていましたが、今回この付加価値のある留学スタディーツアーに参加させていただいたことで、さらに私の教育に対する気持ちが高まり、日本に帰国後はもっともっと日本の教育についても学び、研究してゆきたいと思いましたし、ニュージーランドの教育についてももっともっと学んでゆきたいと思いました。今回、このような素晴らしい機会に恵まれたことを本当に感謝しています。ありがとうございました。